

# 教育的ニーズのある児童生徒の新しい環境への適応支援

## —転学・進学・進級時への支援—

### Support for the Adaptation of Children with Special Educational Needs to their New Environment

漆澤 恭子<sup>1</sup> 阿子島 茂美<sup>2</sup> 伊澤 正雄<sup>3</sup>

環境の変化の影響を受けやすい教育的ニーズのある児童生徒にとって、転学・進学・進級などは大きな不安と困難を抱える。とりわけ環境変化が大きい海外からの転校をとりあげ、事前の取り組みの実践を報告する。さらに教育的ニーズのある児童生徒の転学・進学・進級時における対応の現状と保護者・学校関係者の思いを調査し新しい環境へのスムーズな適応支援のための方途を探る。

キーワード：教育的ニーズ、転校、環境変化、適応支援

#### はじめに

転学・進学・進級などはどの子にとっても新しい環境への期待と同時にハードルも高い。友達できるかな？勉強がわかるかな？担任の先生は誰かな？新しい学校の規則は？など心を痛める。特に環境の変化の影響を受けやすいといわれる教育的ニーズのある児童生徒にとっては、学校、地域、家庭とすべてが変化中、それぞれの環境に適応した行動をとることは多くの困難を伴う。時には適応できずに逸脱行為や不安感の増加、二次障害を起こす場合もある。

今日の特別支援教育の中の残された課題のひとつとして、転学・進学・進級の際の支援がある。新しい環境への適応支援方法を探ることは、教育的ニーズのある児童生徒のみならず、健常の児童生徒・保護者・担任の不安の軽減へ、支援へ、と繋がると考える。

本研究では研究Ⅰとして、環境変化の大きい海外からの転校の事前の取り組みの実践報告を行う。海外と国内とでは気候風土等の物理的環境変化や言語、生活習慣、風俗風習等の社会的環境の変化があ

る。そのような状況下での準備のないままの突然の転校は子どものストレスを大きくし、そこから派生する問題は先鋭化しやすい。この研究では、事前の取り組みを行うことで、マイナス面の軽減と、更にプラスへ転じる可能性があるか否かを検討する。

また研究Ⅱでは教育的ニーズのある児童生徒の転入・転学・進学・進級時における学校での対応の実態を探る。そのような環境の変化に際し、学校として何ができるか、また保護者は何に配慮したらよいなどを探り、児童生徒の新環境へのスムーズな適応のための支援の方途を探る。

#### 研究Ⅰ 転校に伴う事前の取り組み

##### 1. 研究目的

転校の多くは、保護者のやむをえない事情からおきる。突然の転校の場合もあり、多くは事前の取り組みがなく、そこから発生する問題に対しても対処療法的となり、保護者・児童生徒ともに負担も大きくなる。

転校の際、事前の取り組みが行われる意義は大きい。本研究では転校の中でも環境が激変する海外か

1 植草学園短期大学

2 十文字学園女子大学

3 A日本人学校スーパーバイザー

らの転入を研究事例とし、回避できない転校を事前の取り組みを行うことによってマイナス面を軽減し、さらにプラスに転じることができるかを検討する。これらの取り組みによって家族・児童・担任の不安・心配が軽減できることと思われる。

## 2. 研究方法

事例検討 期間 2008～2010

中国A市日本人学校教育相談室 来訪者

事例：環境の激変により行動が先鋭化したAD/HD児。

父母 本児（6歳 男子）弟（0歳）

5歳まで日本で生活していたが、父の海外勤務によって中国へ転居する。日本では幼稚園でも特に問題行動など指摘されなかった。中国に転勤後まもなく弟が誕生し家族4人となる。4月に日本人学校1年生に入学。それに伴い学校近くの日本人が多く住む住宅地域に転居。母は狭い日本人社会の人間関係に若干の距離を置いていた。このころから問題が多発するようになる。住宅地・学校・通学のバスで落ち着きがなく、友達とのトラブル、大人から注意されても聞かない、学校でも担任の指示に従わないなどである。担任と保護者から同時にスクールカウンセラー（以下SC）へ相談が寄せられた。

SCの勧めにより、一時帰国して日本の病院を受診。診断結果はAD/HDであること、環境の激変が行動を先鋭化させているとのことであった。SCが中心となり療育が開始された。保護者、担任等への理解促進、DS（Developmental Supporter、発達支援者、留学中の大学生が担当）による個別のサポート、トラブルに対する住宅地域住民への説明会開催、日本人学校内に設定した子育て支援に取り組む親達の会参加等である。その結果、1年後の再受診時には、WISCの下位検査のバラツキの縮小とともに行動上の大きな問題はなくなった。

3年生時に父の会社の合併に伴い、日本への帰国が決定。転居まで1月以内という限られた時間内で転校への事前の取り組みが行われた。住居の選択、学校選択、SCと保護者による引継ぎのための報告書の作成等である。また転校前に環境に慣れるための学校見学や、両親で学校へ赴き、管理職を初めとし、できるだけ多くの教員に現状の説明をした。

母は学校だけでなく、地域とのコミュニケーションを積極的にとり理解を求めるようにした。これらの事前の取り組みが功を奏して、本児も日本人学校には無かったクラブ活動や地域活動で活躍の場を得ることができた。転校というマイナス面を最小にし、さらに新しい環境の中で活躍の場を得るというプラスの面を展開できた。

## 3. 結果

事前の取り組みとして①新しい環境に慣れるために転校先の学校が決定したら段階的に実際に行動する。子どもと学校へ何度か足を運ぶ。通学路、校舎の周りなど散策。校舎を眺める。校舎内に入ってみる。できれば予め、新担任と会っておく。自分の教室を見る。②事前に管理職はじめ多くの教員へ説明をする。親として細心の注意を持って療育をするが、学校とマメなコミュニケーションをとり連携を図りたい。特に問題が発生したときはその日のうちに連絡がほしいことを依頼する。③保護者、SCと引継ぎ資料を作成する。保護者の説明を補完するためにも有効性がある。

### 引継ぎ資料（※） 作成のポイント

- ㊦転校先の担任の先生がどんな人か分からないので、ともすると一般的な文章になってしまいがちであるが、連携することを目標に、できるだけ具体的な書き方をする。
- ㊧現状では、公文書扱いにならないように、あくまでも親が持参する引継ぎ書とする。
- ㊨当該児童の不都合な行動は、できるだけ公序良俗的な価値観を含めずに、事実のみを記載。
- ㊩SCは専門家としての見解を必ず述べる。
- ㊪読みやすい長さを心がける。A4用紙2枚程度に要点を簡潔に書く。
- ㊫困難点、配慮してほしい点の厳選。身体面・学習面・行動面の配慮を具体的に。現担任が当該児に実行していることと、していないことを書くと、必要な支援を伝えやすい。
- ㊬発達障害は本人の性格・保護者の養育態度が原因ではないことを明記し専門用語は避ける。
- ㊭保護者の養育態度姿勢も記載。
- ㊮情報を一方的に発しただけでは「連携」は、できない。相互に情報の交換があって成立する。担当

※表1 引継ぎ資料(報告書)の一部

	記載事項	具 体 例
概 略	学級での様子 得意 不得意 保護者の姿勢	クラスでも明るくムードメーカーではあるが、時々暴走……。 堂々とした朗読はつい聞き入ってしまう……。 机の中がゴミ箱状態になりやすく……。授業中に不規則な発言をして……。 文字が丁寧に書けてないので……。 父親は途上だが、母親は理解し、家庭でも社会性・学習面の個別支援を……。
経 過	診断(あれば) 転校歴 家族の変化	非言語性LD、AD/HD 小学校1年生で日本から海外へ転出……。 弟が誕生し……。
主 な 特 徴	身体的特徴 行動上の特徴 学習上の特徴	滑らかな眼球移動が苦手。そのため文字を書くことに若干支障が……。 友達関係では、知らない人とでもすぐに親しく話すことができるが、親しさの程度による距離がとりにく……。 ノートが上手くとれないが、時間をあげれば……。
対 応	身体面 行動面 学習面	転びやすいため体育の時間には……。前後左右の指示ではなく、誰ちゃんの隣とか窓が見える方向に、とかなるべく具体的に……。 トラブルが発生した際は、その場で即再現すると理解しやすく……。 ノートは升目の大きなものを使用すると……。
お 願 い	学校との連携 発達障害理解	問題がおきた場合その日のうちにお知らせください。思い込みが定着しないうちに……。 (保護者) わがままな性格であったり、親の躰の問題ではありません……。 (SC)

者と連絡先は明記し、互いに経験を共有し、ともに解決を図ることなどを申し添える。

#### 4. 考 察

- ・転校等の大きな環境変化でも、事前の取り組み、特に細かな情報伝達と連携があれば、子どもの支援は滑らかに行われると考える。
- ・現在の教育体制では保護者が連携のキーパーソンとして機能するしかない。
- ・新たな環境に適応できるように支援する事は、発達を促す点で大きな力となる。事前の環境調整で子どものストレスを軽減させ、さらに自分を変える力を育てるチャンスを作ることができる。それはマイナス面をプラスに転じることができるといえるだろう。

### 研究Ⅱ 転入・進学・進級時における現状

#### 1. 研究目的

「日本人学校からの国内へのスムーズな転入のために」(2010漆澤・阿子島・伊澤ら)(以下元研究と記す)では教育的ニーズのある児童生徒のスムーズ

な帰国転入のための方途として

- 1 引き継ぎ資料の作成
- 2 転入学校のキーパーソンの設定
- 3 前在籍校のキーパーソンの訪問
- 4 複数の支援者の準備

等を提案した。

これらの提案のうちいくつかは国内の状況にあわせることで、教育的ニーズのある児童生徒が転入・進学・進級などの学校教育の中で環境的な変化を迎えたとき(以下環境変化時)の支援としても有効であると考えた。そこで、教育的ニーズのある児童生徒の転入・進学・進級における対応の現状と、保護者、学校関係者の思いを調査し、前述の支援の有効性を検証するとともに、さらに研究Ⅰで明らかになった事前の取り組みを国内でどう活かすか、具体的な方法を探ることにした。

#### 2. 研究方法

##### 聴き取り調査

##### (1) 調査対象

以下の環境変化⑦～⑩にあたる教育的ニーズのあ

る児童生徒保護者およびその児童生徒の担任（本稿では、児童生徒の教育的ニーズの詳細には触れない。）

- ㉗：日本人学校から国内小学校への転入 4 名
- ㉘：国内間転入 1 名
- ㉙：中学進学 1 名
- ㉚：進級によるクラス替え 担任替 4 名
- ㉛：㉗の担任 1 名
- ㉜：㉚の担任 2 名

## (2) 調査内容

前述の元研究より得られた有効な支援をもとに①～⑤を環境変化時にも有効な支援として考え、それらがどのように行われたか、また行われなかったか、その結果新しい環境の適応にどのような影響があったかを保護者10名、担任3名から聴き取り調査した。

- ①事前の面談
- ②引き継ぎ資料の有無と内容
- ③担任との連携
- ④担任以外のキーパーソン
- ⑤学級での受け入れ

## 3. 結 果

上の調査から以下のような回答を得た。調査項目ごとにまとめる。

( ) 内は回答数

### (1) 事前の面接

保護者 (10)

◇なし (4) (うち㉚3、㉙1)

○あり (6)

担任 (3)

表 1 (1) 事前の面接

— 保護者 —

- ◇面談はなかった。在籍小学校の講師が進学中学の関係者だったので子どもの様子が伝わっており「何かあったら話し合いましょう」という声かけで終わっている。しかし今のところは特に問題はない㉗
- ◇進級で事前の面接はなかった。担任同士の引き継ぎはあったのだが、話たかった㉚
- ◇同じことを何度も言うのは負担だし、辛いので、なくてよかった㉚

◇話したいが、忙しそうなので、こちらからは遠慮した㉚

○事前の面談では管理職・特別支援教育コーディネーター・学年担任が同席していたので、情報の共有が複数になり安心した㉗㉘㉚

○あったが、管理職としての発言がなく、形式的でがっかりした㉗

○あったが、緊張する雰囲気だった。もうちょっとオープンに、例えば担任の先生が厳し目だとか元気のクラスだとか先生のこと学校雰囲気のこと語られると人間関係も作りやすいのではないかと。そうすれば保護者も自分を出せる㉗

○しっかり話を聞いて欲しいと思い、「聞いて貰うぞ」という気迫を持って、半年以上前にうかがった。学年の先生方と校長先生と話せてよかった㉗

○担任が誰になるか始業式までは分からなかった。初日に呼び出されてドキッとしたが担任と二人だけだったので気楽に話せて安心した。転校したわけではないので全校的な取り組みについても聞きたかった㉚

— 担任 —

◇必要だと感じているが、管理職やコーディネーター等が代わっても、関係者が揃っての面談はないのが現状㉗

◇校内なら、子どもの様子はある程度分かっているし、担任間で引き継ぎが行われているので、保護者を呼びだしてまで必要としない。呼び出すことで要求が出て困る㉗

○進級担任替えの場合は、それまでの人間関係があると和やかに事前の面談ができる。しかし、担任発表の前に、保護者と事前面接をするのは原則として禁止であるのが実情㉗

○事前面接があつてよかった。これ一度で分かるわけではないが、顔を合わせておくだけで大分話し安くなる㉗㉘

○保護者はできれば児童本人と一緒に来て、様子を見せていただける時間があると支援に活かせる。

○保護者の「前の学校ではこうして貰いました」という情報は参考になることが多いが、逆にそれを一方的に要求されて、できないと理解して貰えないと不満を言われ困ったことがある。地域・学校の特徴などで同じようにできないことを分かって貰いたい㉗

### (2) 引き継ぎ資料の有無と内容

保護者 (10)

◇なし (0)

○あり (6) (うち㉗4、㉙、㉚)

- 不明 (4) (うち㊥3、㊦1)  
 担 任 (3)  
 ○あり (3) (全員)

表2 引き継ぎ資料の有無と内容

保護者
□同一校での進級だったが、引き継ぎ資料があるのか不明。 <u>あったとしても活用されておらず、同じ話を毎年することになった</u> ㊥
□配慮を必要とする子だったが、個別指導計画などを作っていた様子はない(保護者に話はなかった)し、転入先にもなんらかの引き継ぎの資料が送られた様子はない㊦
○日本人学校のスクールカウンセラー(以下SC)が作ってくれた引き継ぎ資料は事前に <u>保護者の了解もとってくれていた</u> ので、安心して事前の面談に臨むことができた㊦
○インフォーマルな書式だったが、前担任が1年間の成長をまとめてくれたものを担任との面談で使ったので、子どもの様子を大体分かって貰えたようだ㊥

担 任
○日本人学校のSCが作成した資料は具体的でわかりやすく書かれていて児童の行動にどう対応したらいいか分からないときにとても役だった㊥
○個別指導計画は形骸化している感があり、初対面の保護者との話し合いには使いにくい㊥㊦
○引き継ぎ資料は具体的で、トラブル時の児童の支援にも役にたった㊦
○引継ぎ資料は、保護者がうち解けて話し合える材料となってよかった㊥㊦
<b>追加質問</b>
★転入時どんな引き継ぎ資料が欲しいか
1 保護者以外(もと担任、SCなど)から情報が事前にくることはほとんどない。転入に先んじての来訪で初めて保護者から情報を得ることになる。もし第三者から情報があれば、こちらから受け入れに際して相談や質問もできる。保護者の見方と違った客観的な視点も必要だと感じている。
2 IEPのような正式な形式でなくても、保護者も参加して作成されたシート(記入事項は課題・支援・成果などが分かる資料)が書面であると、それをもとに共通理解を図りながら支援の具体化ができてよいと思う。

(3) 担任との連携

環境変化時のキーパーソンの一人となる担任への保護者の期待は大きい。よりよい連携の仕方を探るため、聴き取った意見を、満足○不満◇として載せる。

表3 担任との連携

保護者
○担任からの「心配なことがあったらなんでも言ってください。いつでも見に来てください」という一言が嬉しかった㊦
○「私は子どものことを考える親です。なんでも言ってください」というオーラを出すよう心がけてから、先生からも声をかけて貰えるようになった㊦
◇相談したいことがあって、電話しても、会議や不在でなかなか相談できなかった㊥㊦
◇海外では直接電話が先生に繋がって、いつでも相談できたが、日本では取り次ぎが入り、スムーズに行かない㊦
◇初対面の担任なので、子どものことを説明したが、「大丈夫です」と言われてしまい話その先に進めなかった㊥
◇障害による課題があることを理解して貰えず、苦手な書字の練習ばかりを強要された㊥
◇子どもの様子を話したら、先生は構えてしまい、聞いたことにも曖昧な返事しか返ってこなくなり、話しにくくなってしまった㊥
◇担任の教育観が強く、我が子が理解されていくか不安を感じた㊥

担 任
○転入当初は連絡帳を通して、こまめに様子を知らせた。返事も返ってきて、2回目に会った時に話しやすかった。
◇話していても主旨が一貫していない。保護者はこの子をどうしたいのかまとめた意見を聞かせて欲しい。
◇時と場合を構わず電話をかけられ困る。

(4) 担任以外のキーパーソン

- 保護者 (10)  
 なし (6) (うち○㊦2、㊥1、㊦1、㊥2)  
 あり (4) (うち㊦2、㊥2)  
 担 任  
 なし (2)  
 あり (1) ㊦

担任以外のキーパーソンの存在やキーパーソンの対応等についての実態について聴き取った。スクールカウンセラー(SC)、学年主任、個別の支援員、保護者同士が挙がった。

表4 担任以外のキーパーソン

保護者
SC
◇担任や校長先生からはSCに相談することも勧められたが、どんな人か分からず行かずに終わった㊦

- ◇SCに相談したが、ほめるだけで、本人の持つやりにくさの核心にふれた話に至らなかった㉗㉘
- ◇前任のSCのようではなく「担任寄り」という感じで話しくかった㉘
- ◇SCに相談したかったが、常勤ではなく、機会がなかった㉘

#### 学年主任

- 担任の理解が得られなかったので、学年主任が「意見交換会」を設け担任と保護者をつなごうと骨を折ってくれた㉘

#### 個別の支援員

- 個別の支援員が担任と連携し、学級と子どもをつないでくれた㉘
- 担任が忙しいときは、個別の指導員が頑張ったことなど、よいことだけ伝えてくれたのが嬉しかった㉘
- ◇個別の支援員がいれば授業に出られたのだが、認められず自前でつけた㉘

#### 保護者同士のネットワーク

- ◇保護者同士のネットワークが欲しいが、校内に作るの難しい㉗㉘㉙㉚

### 担任

#### SC

- ◇担任に言いにくいこと相談できるといいと思い、SCを紹介したが、うまくいかなかったようだ㉗㉘

#### 個別の支援員

- 支援員（担任が連れてきた大学生）はお迎えの時に母が喜んでいてことなどを伝えてくれた。立場をわかまえながら、母の話相手になってくれ、保護者からも喜ばれていた㉗

## (5) 学級での受け入れ

環境変化時の学級での受け入れの様態はどうだったのだろうか。当事者の子どもたちはどう思ったのだろうか。子どもたちがほっとし、新しい居場所と感じて貰える受け入れの仕方を探るため、聴き取った意見を載せる。

○満足

◇不満

表5 学校での受け入れ

### 保護者

- ◇前の学校との習慣の違いに戸惑った㉗
- ◇幼稚園での失敗から、子どもの特性についてあらかじめ他の子に説明して貰おうと思ったが、今から考えると止めてよかった。クラスの様子がよく分からないうちに、早急に話してうまくいかなかったら取り返しがつかないから㉘
- ◇先生は一生懸命やってくれたが、校内ですでに子ども

もの行動が知られていて他のクラスだった子たちから心ない言葉を言われた㉘

- 担任が肯定的に見てくれているので、クラスの友達も担任と同じように声をかけたり接したりしてくれ子どもも喜んで㉘

- このクラスは低学年から障害のある児童が在籍したり、障害理解の授業があったと聞く。クラスの子もたちはとても自然に受け入れてくれた㉗

### 担任

- クラスの子もたちに、初めからは特別な話はしなかった。伝統的に学校全体が温かい雰囲気なのでうまくいったのかと思う㉗㉘

- ◇初めの保護者会で保護者が子どもの障害について急に話し出してしまった。その結果障害名が一人歩きしてしまって正しい児童理解に影響が出てしまった㉗

★実現はしなかったが、こんなことも考えていた㉘

- ・少数加配の他に管理職も入り学年または担任+2とした指導
- ・校長室で学習の個別指導
- ・理解啓発のための学年合同授業
- ・学年3担任で専科制

## <考察>

### (1) 事前の面談

転校の場合は事前の面談が行われ、学校との共通理解を図るのに役立つという回答が多い。行われない場合も、情報の伝達がされている安心感がうかがわれる。しかし校内での進級の場合は事前の面談はほとんどない。理由は担任の回答では「担任間の引き継ぎが行われている」ことや、「同じ校内なので児童生徒をある程度理解しているから」「始業式前は担任発表をしないから、事前の面談はできない」などである。

これに対し保護者は「負担がなくこれでいい」という場合と、「担任とは直接事前に話したい」という場合に分かれる。「面談を希望したが、行えていない」回答者は「担任の先生に悪い」と遠慮している。「面談で安心した」という声からも、保護者の気持ちを把握し、事前面談が気軽に申し出られる体制づくりが必要である。

### (2) 引き継ぎ資料

面談時による引き継ぎ資料があると回答した全員の保護者・担任が、「児童生徒理解のためや、保護者、担任（学校）との話し合いの席上で使える」と

回答している。内容についても、保護者が事前に了解していることで安心した面談の資料（資料作成の留意点と具体例については研究1）となっている。「毎年同じ話しをすることになった」という回答者は子どもの成育歴、これまでの生活の様子など毎年同じ話をしなければいけないことで学校の引き継ぎ体制への不満や今後の不安を訴えた。

引き継ぎ資料は活用されれば、保護者に安心を与えたり、児童生徒理解の為に有効だった。しかし、資料はあっても保護者には知らされていなかったり、担任と保護者の共通の資料とはなっていないかたりすることが惜まれる。

担任には有効な資料作成のために、追加質問を行った結果、専門機関など第三者からの資料、学校から質問のできる体制などを求める声があった。保護者の理解が前提となるが、有効な引き継ぎ資料のありかたとして検討を行いたい。

### (3) 担任との連携

保護者が面談を申し込んだり、相談したりしようとしたときに、担任が口にする「大丈夫ですよ」「様子を見ましょう」と言うことばは、不安な保護者にまず安心して貰うためだったり、転入、進級などからあまり時間が経っていない中でもう少しよく状況を把握してからという考えだったりと思われる。だが、保護者からは、そのように言われることで、もう一步踏み込んだ話しができなくなってしまふ。「一緒に考えてくれる先生」を求める保護者に少なからず、失望を与えている。

保護者は担任と話し合うことで、子どもの理解を図り、支援につなげたいと思っている。積極的に場を設けようと行動する保護者もいるが、現状ではむずかしいと感じている保護者も多い。

担任には、相談タイムを設定する、教育的ニーズのある児童生徒の理解、支援能力の向上を図る、保護者に対する教育相談能力の向上などが求められよう。

### (4) 担任以外のキーパーソン

担任が自分のやり方に固執し、子どものもつ課題を先鋭化してしまったと保護者が考えている事例からは、担任以外の支援者の存在があることが望ましいと考えられる。本調査では、担任以外の相談相手としてSCが多く挙げられたが、本調査結果から見る

限り、保護者の期待を満たしてはいない。小学校におけるSCのありかたについて検討が必要である。

また調査結果からは特別支援教育コーディネーターは挙げられなかった。

さらに元研究でも、有効な方途として挙げた保護者同士のネットワークを求める声があった。また、元研究では児童生徒の発達支援者（DS）の役割が有効だったことを述べたが、国内においては、教室開放や放課後活動の制約などから同様に行うのは困難であった。

### (5) 学級での受け入れ

新しい環境に馴染みにくい子ども達である。スムーズな学校生活のためには他児への言葉だけの説明だけではなく、一緒に活動するなかで、担任が肯定的にその行動を「通訳」していくことが大切であろう。子ども達はその子の始めて見る言動に戸惑ったり、することがあっても、担任の「通訳」のもとに安心して受け入れることができると考える。これまでの学級経営が大きく影響していることが保護者の回答からもうかがわれる。

### <今後の課題>

- 保護者間のネットワーク構築については、今後、担任（学校）の視点との比較を行い、両者が満足できるありかたについて言及したい。
- 保護者と担任の視点との比較を元にした、両者が満足できる連携の取り方について調査検討を重ねる。
- 引き継ぎ資料は保護者と旧担任にとどまらず、専門機関、専門家が共通理解のもと作成できるようにしたい。
- 幼保から小学校へのスムーズな移行について、保護者の立場から今後、引き継ぎを考えていきたい。

### 引用文献

- 阿子島茂美 他2名 2011 9 日本LD（学習障害）学会論文集 「特別支援教育の課題Ⅰ—転校に伴う事前の取り組み—」  
 漆澤 恭子 他2名 2011 9 日本LD（学習障害）学会論文集 「特別支援教育の課題Ⅱ—転入・進学・進級時におけるポイント—」

